

こころが動いたとき

『自問自答の日々、私の在宅看護の始まり』

看護師 高野 容子

20 数年も前のことです。その頃は癌の末期状態にある人々に対して今ほど、痛みのコントロールも確立されていなかったし、ターミナルケアというものはぼんやりとしたものでした。末期に至った患者さんは病院で痛みと闘って亡くなっていくという事が多かった時代ではなかったでしょうか。

私が新卒で配属されたのは、とある大学病院の産婦人科単科の病棟でした。一見、おめでたいような感じですが産科は別でしたので主に婦人科系の病気の方が入院されていました。大学病院でしたので特殊な病態の方や、筋腫等の手術目的の方、不妊症、癌等様々で、子宮がんや卵巣がん等の末期に至った方も多く闘病されていました。その末期の方は概ね似たような経過を辿り、(もちろん個人差はありますが)膀胱や直腸に瘻孔が形成されたり転移による腹水や胸水の貯留、イレウス(腸閉そく)を起こし人工肛門を増設したり…。中でも癌性の疼痛はすさまじくそれは悲惨なものでした。苦しみの中におられた患者さんたちの姿、ことば、表情は今でも脳裏によみがえり、「私たちに何が出来たのだろうか…」と何年たっても思うのです。

Mさんは30代半ば、自営業で夫の商売のお手伝いをされていた方です。まだ、小学生のお子さんが二人、学校が休みになるとお母さんに会いに来ていました。卵巣がんの末期で毎日、表情は苦痛に歪んでいたけれど、子どもたちが来ると気丈に笑顔を見せられ母の表情になられるのが印象的でした。

敬虔なクリスチャンのYさん。修道院で生活されていました。どんな痛みや辛い治療にも決して弱音を吐かずに祈られていました。痛みが強いはずなのに、我慢して我慢して、いつも笑顔でおられたのが却って辛かったことが思い出されます。あまりの呼吸苦で自分で息を止められた時は驚きました。すごい精神力でした。

痛みが強いと医療麻薬を投与したりするわけですが、徐々に幻覚等が出現します。意識朦朧の中、シャンソンを口ずさみ最後に大きい息をひとつして息を引き取られたKさん。

「やめて。やめて」と治療を最後まで拒否されていたTさんはご主人が昼も夜もずっと傍についておられました。言葉は少なく私たちにもあまり話はされない方でしたが、見守るその眼差しには強くて優しいものを感じました。

出会った方を書き連ねればきりがありません。

この苦痛に歪む人たちに何が出来たのでしょうか。何とか苦痛が和らげられないだろう

かと傍についてさすったり、温めたり…としながらもドクターの指示であるからと、意味があるとは思えない採血や点滴の針を刺す私たち。痛みが強くて何とかして欲しいと、何度もナースコールが鳴ります。強い痛み止めは時間をあけなければならない。何もしあげられない…。ナースコールが鳴るのが正直怖かった。逃げたかった。何なんだ！何もできないのか…？と自問自答の日々でした。

亡くなる時はあっけなく、そして「やっと楽になれましたね。」と、心でつぶやき、私たちはきちんと寄り添えたかな…。と、また自問自答してみるのです。

このような経験から、できれば慣れ親しんだ在宅で、できれば苦痛少なく心穏やかに家族に見守られながら、その人らしく人生の終焉を迎えることができないものだろうか…。そのお手伝いができないだろうかと、思ったのが私の在宅看護へ始まりで、今まで出会った方々への罪滅ぼしでもあるのです。